

人間性の評価

古瀬 義夫

(P. 2)

「コミュニケーション往来8号」が送られてきた。その中に今井直治さんが「備北」はじめての出荷を終えた」という文を書いておられる。……8号参照……

以下、「価格」「直志」について今井さんは書いておられるが、こゝらで引用をやめる。

読んでみて感じられたかとも思うが、これが農業の問題を取り扱いながら、視点をかえて読むと、正に教育問題と重なり合っていると

言えよう。確かに私たち教師は、生活のために子供を社会へ出荷している生産者であり、社会の要請に

応えるために、L・M・S(教育の場では五段階評価—指導要録)の規格分けをやっているもの

ではない。「ダイコン」などがその大きなことによって区別されるのは、おかしいのではないだろうか

。この今井さんの指適は、個々人の個性の多様性を、社会の規格によって選別し、それに価値的差別

を与えている現在の教育への告発とみることもできよう。

(後半の「料理の際の工夫」「消費者云々」「直志」などは、ダイコンと人間の違いを考えて、自立

的な人間が目的というように今井さんの文を読みかえてみて下さい

。こゝでは省略しておく)

個々の人間の個性を十分に伸ばす社会を考へるべきであり、ゆがんだ方向を教育が先取りしていく

必要は全くなく、それは「狂育」でしかなくろう。

社会のゆがめられた価値基準による選別がどれだけ教育というものをゆがめたか考えてみればよい。

量的に不可能な教育内容のノルマ

を課せられ、わからない子を切り捨てながら、はみ出しをワクに押し込めながら現在の教育は行なわれていると言えよう。

さらに、人間の差別、選別である「評価」について考えてみる必要がある。かつて評価について書いたことがあるが、もう一度要点だけ書くことにする。

評価の問題点として、オ一に人間が人間を評価すること自体、理念的に許されないということ。これは人間が人間を裁く裁判が、審判がなされない故に、残された方法の中で、オ一はオ一な形であるにすぎないという言い方しかできないのと同様である。

オ二に子供の評価は将来への一つの決定的要素となりかねないので、教師として未来へ責任のとれない以上、すべきではないということである。

オ三に評価による判断で支配のラミッドが形成され、人間の平等と安易に犯す結果になるので許されないということ。

オ四に勤務評定で教師が自ら評価されるのに抵抗したのと同じ理由が子供に対してもあてはまるということ。

そして最後にガウス曲線(正常分布曲線)は、自然界の大数の法則であり、クラスにあてはまらないことなどがあげられよう。

市北掘町カニ 古瀬 義夫

「若い人間は試験地獄だの何だの、この資本主義の社会にどうしてもなじめない。親や教師は、がまんしろ、現実からはなれるな、でない」と

人生の落後者になる、という。でも、ぼくたちはどうしてもいまこの場所には定着できない。この日本の現実から、ユートピアまで漂流し続けていきたいんだ」

東京キッドドラマガス劇団員やファン六百三十七人が、昨年十一月、金を出しあい、静岡県又

峡近くの山林二千三百平方mを買いいあけ「さくらんぼユートピア」と名づけた。一人当たりわずか

な面積だが、自分の墓を立てるもよし、畑仕事も結構。民芸品をつくって

生計を立てる案もある。「さくらんぼユートピア」はこしの中に千葉県と鳥取県にもできる。将来は

全国に8ヵ所。七〇年代の「新しき村」だ。

だがビッピの放浪とは違う、と劇団の作者下瀬

出家の東はいう。「ビッピの村のように閉鎖的、内向的なもんじゃない。開放的なんだ。彼らのように麻

草の助けをかりたって、この現実から逃げられるもんでもない。逃げるのはやめよう。ぼくたちは新しい共同体に向かつてこれから出発するんだ。公害、GNPの頭うち、洪水に見舞われた日本からノアの方舟(はこぶね)にのって出発しようというわけだす」

「脱出の旅」は、新・放浪派。発見の旅を。新・放浪派。幻想を承知のうえで、彼らはまた旅に出る。劇団が出したことしの年賀状に劇団員十九人の連名で「旅をして見上げれば天に星」とある。

「ミニューン」好き者会

次回は2月27日(日) 於

宇口市民会館35号

1972年1月23日